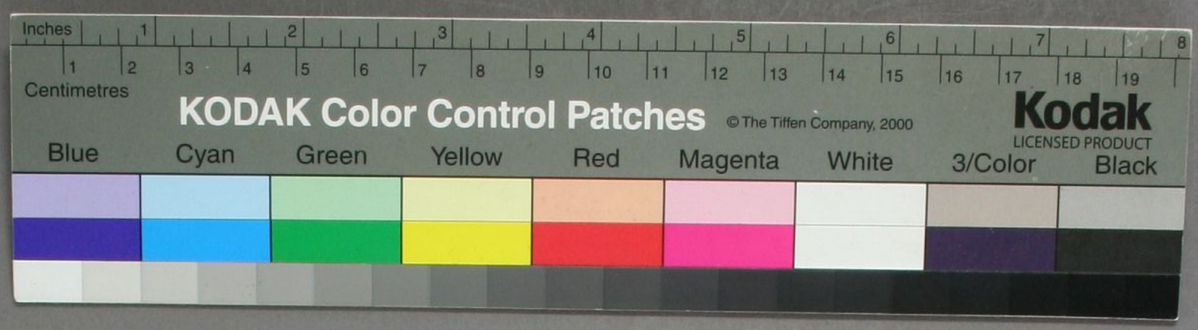
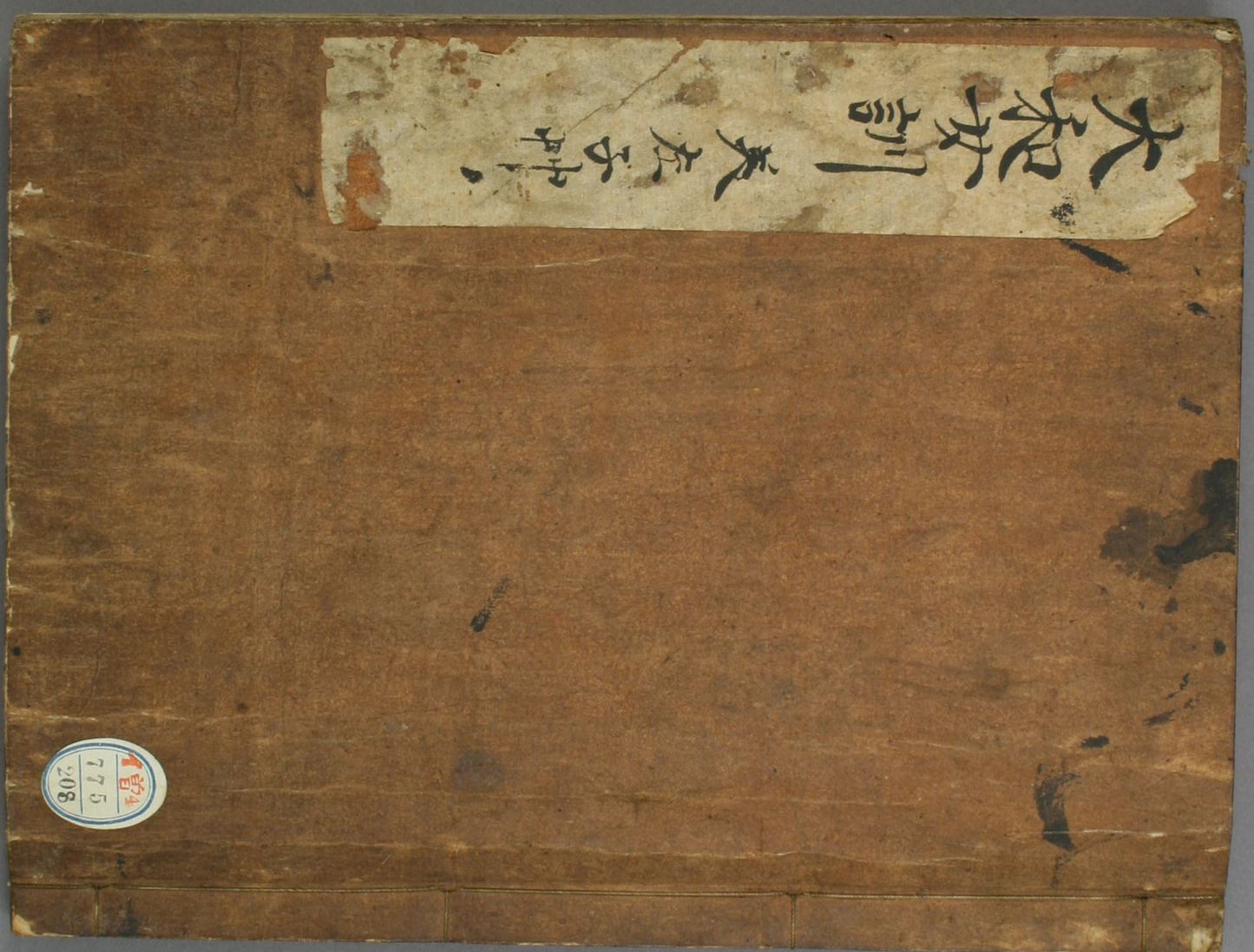

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black



曾 門
775
208

大和女訓序

是よりさ記世そしおこなハ新くところ其女訓の書
をでに教十部に相よべり 予其所載をみるなり。
和漢の貞婦の傳よいたりてハ詳なるに似たりと
いへども教戒をのぶるまおよひ所ハ言ひ尽しして
要をくれし。今市が記せる心ところハ先ぼうか
なる所探りハかく稱ふる所索得ハあらず孫ぞ
試そし我朝の女國なることを所あぎて。女子ハ
おとけらるゝ。

天照太神及びもろ〳〵の神祇を。あうこむべきあるゝ
間しをしらしめ。夫君舅姑にはふかしれをくゝへ。
次に雛遊貝合の本などかきこれをはきて。
女兒の観覧に為よりきんとの巻のまくしきハ
よむもおくゝ面げらんとも思へばなり

享保五年正月十一日

肥後隈本

元水奥井澤長秀書

大和女訓上

蟠龍子著

大正二年一月廿日寄
中村楢雄氏贈

一つもく我朝を。女王國といひ。姫氏國といふハ。そのかみ
伊弉諾伊弉並二柱の御神。天降をなひて。国土山川
草木までを生し。天下之主にとて。日神を生し
給ふ。これを天照太神とゆしなりて。女神なり。
その頃しなへる國なる故に。女王国とも。姫氏国大
なれば。日神の御國なりとて。日本ともなづきり。
海中に陽を含みなり。大日霊貴とゆし。主徳を
日神となしなるゝ。其様よりこのかた百王百代。
今にいたりて。寶祚をつがせなふ。是皆女神乃御
志なり。國は女王国。姫氏國とよびて。又倭奴國と唱

るも陰中に陽を含めるはなるの謂なり。陰は弱なる
なれば土にくらべり陽は剛なるなれば金にくらべし
土金の秀なることもつとも他邦にも超たり。男女に
かきしれば。其力は是神明の所合なれば視聴言動お
ろそかにすべからず。志なる我いかなる世の白痴者か。
いひ出しけん。女人は罪ふかきものなりと。多ぶらか
すれよりかれは国どいされたく神といのまは罪あるに
なしいふ者なれば是大なるあやまりなり。女に
罪あるも皆べし。男に罪あるも皆べし。女のこそ
かざりて罪ありとはいひたしかれば輕重なし
殺るものは女王まで国まで天照太神の女神なる
ことは知ざるまや。知ながらなるみしなれるが是こそ

天地不容の大罪人とはいふべきなり。そのかみ岳仁天皇
の御宇倭姫命。太神を祭りいたし。國々をめぐり
所々に文を建ていつきなり。後に伊勢国宇治の
にて誘り国しくね。志ならずして豊鋤入姫よりも
姫子内親王まで。所々七十六代相つぐ。太神なり
ぼくへ申すこれらをもつく。神明の女人と思ひ
国はざることは知べし。女はつとめて小天照皇太
神及もろくの神をあがめ見て祈ることなるが本
意なるべし

一女子六七歳ともなれば先平がる我かくしめ。行か
ず我ならはすべし。よくかなえば孝経四書小学
近思録などは読しむべし。かくしまた後女訓を

記を得和字菓子などは小学。菓子のやまし小学。義笥百そ童子訓。比賣鑑お編。三經文常
はさぐひよし。まれはよみく雲あるるかかし。人は[illegible]
の道。孝順貞潔の理とあらば[illegible]
[illegible]源氏。伊勢。大和などの抽ぐりとバスせ[illegible]
[illegible]
いかに[illegible]つきすかかなりとも。[illegible]
はらざるに言行まあやまり出来べし

一女は手跡よくとも見ざりに書て人にあたふるなり
[illegible]ひ[illegible]むものありとも。嫡みなど[illegible]
所などは出べからず。親[illegible]者の下へ[illegible]
[illegible]ばるとは。文云ふるあらしく。[illegible]用のまま
と書て[illegible]

一古語云嚴父出孝子嚴母出巧女とあり。[illegible]

志き父[illegible]は孝ある子いぐさ[illegible]
手きくの女出来るなり。女子乃紡績織紝乃術のか
らざるは。[illegible]母乃罪なり。[illegible]
むし。天照太神居[illegible]織神衣と。舊記に見えたり。
況や[illegible]下乃者とやり[illegible]女職小れてるべからず。今
の世[illegible]小祿[illegible]者の妻子なと。女工をかく
えて[illegible]
[illegible]女職ごとしひの者とき[illegible]
[illegible]

一一書云冬女工一月初四十五日とあり。これは一月二十日の
[illegible]女工[illegible]。又十五日小あ
[illegible]あはせて四十五日といふなり

一かたち小男女のかたりあれども心はさのこゝなるべしだ。
生れもと吾なり。幼より道よろしきに流る
ることなりるべし。書籍よりも理をもとまへ心を正し。
身を修め苦練して海どいぢして。天命を為のしむ
べし。男女ともに形をうるはしくせんこと欲しひれ心を
うるはしくせんこと欲しひれ内をもてくかをいる。
ゆどえ分にあらずや。ぞもぞ胸裏乃物説を見
ぐらべ。美事の分別掌をもてかごとくなるべし。古
歌にくりもなきいにしへ今もへどそぬいんまんぐく
かぐんなるしんとよめり。志る我男はたもあらん。女は
いそぐかはとのふものありこれぞ嫉しいふ金財を泥
土にし投るくらひなり。古言にまりなしや人をそ

人といはぢしめんぐらう勇をやなりひとつべきとよめる
にぐらり

一朱文云勧学文云。勿言今日不学有来日勿言今年
不学有来年。これを女子に比していふまぞ八歳よ
り十四六歳まで親の教に居しとぞづるの年月なり
主間に日夜をわしまんて女職をもげ海し。手法を
ならひ書籍を読べし。今日はかゝるさいりあり。明日
よりなしふべきなどくうかくこゝろにうちに往
なく嫁娶して他人に海じいりものまゝひとなる
し紀。悔めどもかへらざるなり

一男女ともにいぶべきことのこゝ我いひてえたりに物をいふ
ことなり往。女は往さしにまめにさぬまぐ分はまめも

ゆゑにくさものなり。古語にも辭達則止不貴多言
と右乃こゝろ也

一 俗語に男ハかちひてそだてよ。女ハさげてそだて
よといへり。是女子を生てハ三日産の中に所しむといへ
る語にしかるべし。男ハ天にして無人女ハ地にかたどる
しかるゆゑかちひてそだつるハ手厚とうしなかしむる
なり。厚とうしなひぬれば力全しくざるを宜なり

一 俗間女子をそだつる。ゆゑかふ語をいふ。雨をも雨をする
又母ともしたがハぜおくろしそくさなく身もち見
ぶりに。聟たるぐ。おもく物いひ人をそしりて己をかこり。
欲ふかくものゝ神をうし。婢女をしかり。親に誘ひてる
ぐひありかくみだりにそだちしるものゝ人を嫁せし

こゝ紀文の家風をそしけれバさてもものぐさく氣ぼまなる
なりとぞこゝろに大息をつぎ。曾姑をうしく見いさどなる
小いたりかれにつき居たる婢女などはいさゝかんとハさで
実にいりふこそ。雨いしき水半やといふよりも
ゆる大に新をそふるごとくにくゝ雨をくゝ中あく
なりて出さるくなり。幸にして出されずともゝ見るき
らをてなしくび居たしんいむげに口をしるべし
先女子の親乃をしへい雨しめのゆるかせなるよりたゞ
れり

一 女ハ貴も賤もうま待てより死にいたるまでやすを紀
する紀ものとゝ孫てより物をして物を苦にまをなこ
とあるべからず。苦志いてやすを紀ることをなんとしらハ

くゝつてワざゝひを招くべし

一 幼より男女のワちぜぜしうまくべし。兄弟といふとも男女とは一所に居るべからず。衣類をもなれじ。こころはおろぞ。なれし所までゆあるせぞ。物をうけとりつゝすぎ。せまぐひ小下におろせそれべし。まよりまへ。そぐにまくすべからぞ。そのうへ鳥羽院の御女。賀陽門院の姫宮ハ。せまくしきにうまゝ。男女ならびに居る。後とかきる。廂をゝにしてすべりと。古記にあり

一 古語に生男如狼狽怨其尅生女如鼠狽怨其武といふこころハ男子ハなされきより。氣をくじかぬやうにそゞろべしとの義なり。宋代くじきぬれバ。勇を生しなふことあるハざれバなり。女子ハおされきより氣代くじ

きてそゞ沙べしとの義なり。氣をくじかざれバ人の中にうつてあるハざれバなりぞやくしく志くおそまし志ぐがふハ女乃大禮なり。負しく作し。是情ふかくものをあるれ。そのいひ起居までも志づかにすべし。若親まちからひ口ごとえさバ。さびしくいゝ。しめてどもむべし。これを必ぐ免ぜんバ。夫君舅姑もちからふべし。さらくいはゞ出さるゝのりとなるべし

一 古語云。娶女不生顏色。賢德便好といへり。容色あるはいやしきものにもなれし。ぞそしくいさぞよくやりうぎ志ぐがひ。いんまりあざむくことれくうしみ祈さむとなく人をそしらば欲ふからぞごとばをくれくして。兄さかを守れものあるハ兄

めくちまはかくはなべしば

一 俗間幼約束とて男女のいとけなきとき其親どち縁を組れくことあり。甚ぐよろしからぬ盛長の後ハ

かりそぎ悔めるれもとねとなるとの笑し

一 妻をむかへたるとき別けが亂をおしゆべし。世俗当時ハおるとつかさん為なりとて是非をいとぐ年へて後をしへ向しむる事なり。こゝにいと笑いまことれし古語にし教子嬰孩教婦初来とある所なりひ

見るべし

一 婦よくしふべし。けまたしかんかへ親の家をバ法がすして舅姑の家をはぐるれバ。けが親より大切にしうやまひいと成しこそ法なべし。世間ハ姑ハ嫁をふくむといひ

ならハ此家にあふさきるさきく事ごと成是もかれも

うと見えいへ俗かぷくみくいへ俗かとぐらぶ家。姑も

そのころをはかつ知ぐ。俗にのむすめなしバなどかく

あらんや。他人ハ情なきものなりといさどなることもあ

りと見えたり

一 小舅女あらバ鉢中其ものと申すべししからざれバ

舅姑乃中へぐれもとねと成べし

一 舅姑もよくしふべし。おのが女子ありとて也。他へ法がいし

てしづらしせすけとなるしば。此所に終る朝まで家を

けとなるハ娘なり。姑にけが子の婦なれバこころを法

きてあられむべし。他のいつくしめる女子と義をも

つてもしひうをあ。情なくあくるハ甚ぐ不慈なり。

の施をうきそぞ。お物の紙を取りなり。女は地にし則る
取りし間紙なりてこ面やうなりといへり

一 婦の夫よしたがふは民の君に法ふるがごとし。其力をつ
が物となりふよりしてさ面ぐのうしみいさどなり
紙取るなり。てよびつがうと夫よあたえくのちは。つが
ものよいおうしびなり物よりうしどんは仔をうこしうん紙を
かいきどんうん

一 俗語に婦は夫の濁紙の紙なりといへり。理りしあて待
婦人は夫君をこ君となりひうやまひて判するに。
らざしたがひ諸るべし。やせらうとしもう待よりれ
てうろしむべうしば。夫ものをいふとれは。紙く形るも
仲りてきくべしいうれいそがりしくしもせらるがう

こゝふ面うしば。関は其ことばれそむうぞ。則所になるに。
おぞつうる紙ことをばくりしく。弱手間く教に面うきビ
さしとひしぎくよぶともうみくるいろなべうれ。手に
物紙打ちうともぢしおさそまづゆくへしなそかるべうれ

一 婦としては志ばくれ間も夫の恩をつきるべうれ。つて
うしは道をそむくなりまれ落にまりて衣服を食
と飽まで。にし。居紙遊るせなはいうがうの恩ぞや。
志る紙夫の妻紙やしるひそこくむはめづしきまに
あうぎと。不足のたひとれし。己がんまに身をもう
まをなびしろゆきなは天にむかつて嗤紙吐とのよひとし
かれうば其罰おのが身小あくるなり

一 嫁してゆさしるまの家のよれもあしきも天より祝に

あたえの人なり世間も人をもうしむべからず他の家は
よれを愛てこひ祈ぶふはなりぐなりなり其人をば
うけ得ずして此あしきなりとあきらめて此
くるしくがれしくともばじめ小人なものにもなけれどいそ
ぎこうちむかひしるをぎ成つとめて一生成なくるべし志
かなこはあしくぞよれ所もあらんなどおもふはぶさごこ
ろなりかさこころあるは面は人にして人は禽もなしなり

一 貞なる女の恐き男にぞしたるもあり若き女の恐る
男に見しるもあり足皆さごさまに給る命なり志る
成彩鳳随老鴉の歌あらばばそれは成と滅し名成
流れべし

一 むかし崔氏といへるわかき女盧校書と云老人に嫁せり。

夫子の妻が己が老たる、成猛いんかとなりへるんあり。詩成
賦して懷を述ましいひしかば崔氏をことばの下
に詩成たくりて、いそく。不怨盧郎年紀大。不怨盧郎
官職卑。自恨妾身生較晩。不及盧郎年廿時。と云
がひに大に笑へりとなん

一 夫子はかふなりにぞこそりあるべからず夫外へ出ばいくらの
の婢女ありともかれはゆゑぬべからず。見づらう衣服と
出して着を刀脇ざし。扇までもろろえるあるべし。
ゆかしとれは出むかひて刀脇ざし扇成とりれさめ衣
服とせるもしべし 小男なる者の妻下女二人つゝ程なるしはよろしのなりも
夫の他出せるあるとに家来しは常に奥まで通れる人な
りとも夫他出せるよしといひ出しあり。對面なきべしが

仕附宮よるべし

一 夫の留守となさば堂もかくりに婢女を置べし。衆ハ相
ゆゑ小婢女をそばにはさしめ守刀を附て添へ始まべ
し。淳史資人乃入来ることあらんかとの用心なりまべ
て家内の出入まことをつき。男女入内じゆるやうに
いかしむべし 男の留守に伝なと来ることあらば目のあたりに置
て付きれぬやうにして帰りハ即ちあべし

一 夫留姑乃飲食するものハ婢女に命ずるともおろそ
きていさしよくいとなませ。ゆゑづから伝授をもこそろこ
てすまひべし。さるゆゑしゆゑそれハ留姑夫君ハ何を好める。
何を好へるかや。小留女。又ハひさしくこと歌まゆるへ
ける婢女などそしるづ。問くよくしべし。神代のハ
ふしへ瓊々杵尊乃妃木花開耶姫以下定田号田

挟谷田以其田稲醸天神酒嘗之又用渟浪田稲為飯
嘗之と見えたり。況や凡下れものをや。飲食のことに
心ゆつきぞるハ和こそ行るなり

一 夫飲食のとれハ見づる伝任ぞべし。膳を目の上にさし
げてもらゆき。ひざ後づれて。お忌量べし。立ながらす
えぬるなれ婢女なりも命じて。手にかりる物を。
さらなるがら出さぬやうにあべし

一 欲ハ夫よりはそくいれ。朋ハ夫よりはそく知て髪ゆひ
衣をきらゆべし 唐の李義山も早朴晩記を欲貪といひ散髪と不詳とせり 婦の夫乃前に
出るは臣の君乃あるに作て居がごとしたれども常の
事なれバおこしき衣服をこころに両せがしおこひ
ちらばておかつかぬやうにあべし。すべて度々身を

へて義理を立てせ給ひんより。そこまげて上意に思ひたがはなきに
あるべきは。毎度これを受て。是は且はいきどほりて道をけ
きまふべき間ぞ。かゝる不義をもてもしかこそ口をしけれ
聚存念ありとて。ぞんぞんの数を剃て死となるべきけに
と貞女乃道をもしる。ぞたがに信長乃ぞ貞女程
ありけるとぞきく人感じあへりしこ。蒲生家にはんとり
ゑつよ此程家の息ん感ぜしといへども死なりなれ言ひ
でくぐ。あとひ供奉なりとも死をきらずしてい言ひあやまりなりとは
これによりてゑつよ義明の妻者盛が三人の子を為てけん為
なりといひて雖欲清盛の妻となりぞてしもあらで大義
の長成の妻となるなどし。千載の下といへどもさく耳
とおもふべし

大和女訓上

大和女訓中

一夫いかに情なく無恥のふるまひありとも。恨いさどなり
て道をしまぐふことあるべからずぞ。おのれをもてしして。
おろかなりよりぐるはをしへみちびくべし。むし
網忠興豊前におもしけると。家信に飯河老前
宗祐飯河山城守信堅が男なり。信堅は足利義輝
義昭をつかふ。宗祐は浪にして尚家の臣となるなり。同子肥後宗信
といふ者あり。宗祐は三千石を賜りて。同国竜王の城
代とせし積。宗信は六千石を賜りて。長岡の号をゆ
るしなひ。同国巖石乃城代とせしなり。志るに宗祐宗信
卿の罪科によりて。慶長十一年七月廿七日。西人とも
教害せしなり。宗祐が富への使は。河北多石見二代目の夏見なり。先祖は
村上天皇より出て。名和伯耆守長年が才河北与市
宮別が季なり。故あつて姓は河北多と号ひ。すしびに逸見治

右衛門なりし宗佐が方への使は増田蔵人なり。宗佐が妻は、茲
田助右衛門是政（筒井定次が女子なり）が女子なりしが、いかなる故にか三
年以来宗佐と妻女不和にして対面せざりしに宗佐
父子誅せられしにさはまりしかば、忠興是政が怪我
とよびて、是なる父子は罪ありて誅せらるといへども、汝が女子
及孫女（あいはらふ是政がむすめが生る子）は罪なし。汝が方よりむかへ
とりて母子ともに命を助けよとの由申つかはさる
かれば肥後が妻つねに不和なるまでとて命を助す
かり候ひしは御尤もなれども、忝き仰せに候へども
ねもごろに候へて、かくとやはらげられば宗佐が
妻が返辞に有り、筒井が志をかんじて無事にて
れどもさしたることもなく、まぼろしのごとく候へば、人倫の
道にそむけり。女子は東西をわきまへざるものなれば、ただ
くみくし候へば、使はつきそひて帰りしが、宗佐に
わかれて大に感じ、奥へ入りて対面して来りしかとの
事なりしが、案じ相手にも自害しそうろうころ
宗佐が妻が兄探へ仰せられければ、かくや（豊前の宗拾は捨任す）
（みなひてつつく御さ切れて宗拾が二男仮河岩住）
（以下の者がかくはかられて名切死せし古方に死ぬ令聞きて）

一 夫のあぢしふるまひなどもあらば、身をとすげうちて肩脇て
でむかしとろうしに王輔といふ人あり。疫をとりひ
て命あやうし。医者を頼みね。輔二人の妻あり、豔娥
素娥といふ。共にかくれ、小屋に看病して、素娥淫ていと
くもてなし、病気ありて、すこし癒ぬ。かくてこの世
を死なんとしに、豔娥ひそかにいそぐ人に生死は命にあ

りいぐらはきべきとものに犯しまゐふ事ならばといふ。鋪ハ道
見ふまでやうへども。二人がことごとく紙はぶさふこそあり。房所
念て後ものいふ素姫のこと紙冤也し。封じて淑人とも
豔姫これを恥ていと面を見てさけりとなりかりにも
うしろぐらきふるまひなりぐらぐ

一 婦ハ他の男の噂紙きたりとも。かれらぞいふべからぐら
禮よつきてむかし肥後國に河風之郡実明といひける
ものあり建久八年九月十九日飽田郡河風庄にて五和
春日住吉河蘇 大明神を勧請して社を造営す其祭禮のとき紙能を
奥行せり能れなりて好。実明妻女にむかして今月の
能はそはいづれ也かれしかりしやと問ひるに妻女
こゝえく花若 実明が留こそすぐれ侍ると何ごろ

なく答しに実明大に怒てさそハ妻女花若に怒想し
けるまとうたがひなりひて罪なき花若を殺害す。
かくて半年ばかりるゝ好妻女はるをとり積さくて是
うしみ身を白河に投ぐむかしくなるがれが侍女
十五人あと紙追ぐおかしく身を投ちとや其
墓今に河風外城町といふ和にありむかしの愚
愚婦ハまれなるべけれども他の男のうわさかれらず
云用なるべし

一 夫情奥大酒等紙なきばいふまやはべる淫行のるあり
ともよるくいさむべし。祈たむ風うまやきこえむ
しを急して口紙つぐむるなるよこし風にいら
り服しくだこそ夫がんまはしくひもせめうしなる

右祖帝。僧と尼と入申しかりて女をなすなり詣して
禁ぞし給し中ありなりて勇武の男児の道をしら
ざるは。濫をして遊賊となり巧慧乃女子の道を知らざる
は濫をして淫婦となり蓮葉の小ごりにしまぬ葉
のとの帯なるべければ。人乃父見るものにくいましめ
深くおしして尼となすべしである人女子は申しむることを
なるとも成つきることなれどそのことばをいふれば迫しとのべとも子孫あり
女の身もちみだりになれるは女なることを成つきなるにしたり男をうる淫なる人
これをそしり給やうをとさんや

一 俗間の女乃神をきくにうたがうたひ三縁をひき酒をのみ。
化事のもはいひをうるにも女は挨拶し笑ひ戯
なとする成やけしきん人といひ仰乃道を称ずひ数珠つ
まくり。念仏新月となる人をよれ人といふかく風俗

くだりゆきばかりのうちゆくいかなるんとなるつかなし

一 そしひ子どもいくとりはたらう大きな男ととりあるすべ
りしいひがねなれ若ハ衣服を小児の二役になりし。姿
ともゆきびゆあるせざるも多し。いとあさ海し

一 子成乳母をいざうせて門外に出すとも袖迫く並べし
をくゆしむべからず。乳母の年前く容色あるものハ深くふ
べからずなのう淫行の為めよくぐことのなど成子にはさそ
病いぞくなりのなかしものとも心成はくべし

一 衣服ハ身の程にしたがひて だるべからず役とつきばふ
くちらしとはくるとも。古風めれ為ぐきんしる色にはしべ。
世るにしやるなどいひて大なる二ツ役大なるちらしハ
を惡すべしさくろいかなどなどしくとも見るところ。

かくあらハ浮屠なるやうまやなりなさん。一書云劉亟相
摯。家法倹素閑ハ雍睦凡冠巾衣服制度自其先祖
以來常守一法不随時増損とあり。かくこそありたけ

一倹約を当とすべし。今の世の婦人奢着することもな
ほよかれく衣服とこしらへ。樋の底をしあくらふること
あり。父兄夫君もつとも捺すべし。是のふかざれば
諸道具当用さへはかへざれば。なれりなんぞかざりあ
れ菜蔬ともつてかざりなれ乃物に法ねやさんや

大和女訓中

大和女訓下

頃日一書紙得たり。何人の作といふことを記せしが。その載る不
知ん小。菊遊貝合れるを詳に記せり。今その要を抄して
左小のせて児女乃親覧に備ふ。而ゞ作ふにはあらず

一書云菊遊のはじめハ。そのみ天照皇太神神風伊勢
國百船度會平治川に御遷幸のとき乙若子命
麻祓神菊灵等紙もつて倭服命にそまつりて解
除となさしめしなり。菊灵ハわさ人形なり。一書にハ倭服
上ゝ時乃紙麻祓菊霊とあり。菊の字紙各目に
ひいなとよむ。今の天児のこゝろなり。或云菊ハ天児れ小と云
御祓のとき其所に
おりしあやまつところ此つゝとゞ紙は菊灵に祓解なふとて
大海恩をかゞしすておろしまかく志く。云ふ恭年の男となる
祓ぐさなりざるによつて此拙物天児を小児四人菓のこれ。

もてあそびして所以を忘もつくの病弦とくらひのそく
はまじなひとせり。河家沿革立石子の條にも阿木加津
沙側に重しあり（源氏物語抄云。あまがつは三界までこれを用ゆ。這子のごとし
宮ありぐ大家の婚礼にも惡魔をしりぞけて。宮物にも
うことをはまてさらにかしむる。指物といふもぞうこのくぐひ有り。
嘉祐に「西後川路に出さん指物と為にそふげとまれけるのまゝ」三月三日は菊
あそびとなるもの。ハもつこしにても曲水の窠にて河邊
に出て。此後し其身のけがれをあらひもつくの惡事
をとらひ病弦をさくはらはして。べくあつまりて桃花を
ながし酒を汲浮を飲じて。ゆきべり中朔にて額京
三年元年三月上巳の日。後花に華ありて。後しけれて
桃花の宴をなしはべり。志るとれハ三月三日女子菊の
宴をれしことふくも皆後ぐさの緣なり
市按ふ。一書云。三月三日雛遊。今日良賤兒女製紙
偶人。是称雛玩之者。元贖物ゝ義而乃後具也。或名
母子。一号遠子。蓋以斬物。撫母子身體。於水邊解除之。或
飲桃花酒。亦假枝半之微意乎。今雖不修禊事
爲人形。戯飲桃花酒者。多古意矣。道生ハ牋云。
劉臻妻陳氏。作人勝。或剪綵或鏤金爲之。忘ふに
人勝ハひいななるべし
神宮の女童子いわしへよりもてあそびたし。小朱びいなとし。
朱ゐどの人形男女をつくりこしらへ。衣服をゑりさし
きせ。屋をいはこしらゑ。其ゝに屋主夫婦家行のよそおひ
をれしあそぶるありかくちいさくつくるハ。女蔵名命の
所をくちをかくどゝるなるべし。此神ハ四ヶ日の中乃醫
術と百民へをしへ。方病をいやしもろくの病苦をはらひ

一貝合ハ右よのもるごとく。諸貝姫蛤貝姫大己貴命乃貌我
もくひまいらせ次勢理姫と婚姻をなしのひしより。
諸貝蛤貝乃名もしよせく。貝合とするの記なり。人の
世となりてハ寛乃天皇五十三年十月よ。東国へ幸あり
て三総国より常陸国廉鳩へいたりゐふ時大そらに覚
賀鳥のなれもぐ分投をゆゑひ。其鳥のうたちを見
むとて海中へ御なしを行ふ。ハ白蛤を得ふ。盤廉
六局その浦の蒲をとり。むすびて縦とれし。白蛤我
膾として天皇へ御答をなりけるとなり。さらにまつて
廉鳩乃浦の蛤乃貝我ひろゐ貝合をして夫婦の中や
りうぎむつましく。蛤貝姫のおぐ両乃貝れあひ。絶し
きれやめいはくしこの光をむすびしまそへことぶれて貝合

△と書て
玉我うせる
貝なり其
玉我照花
珠也

をなしまつり祝ふものなり。人の世をし。結納乃ことぶれ乃。
聘とはかはさふ酒と局と常と我家れくるも。盤廉六局
が蒲子縫の常をとゝぶれ祝ふなり。蛤ハ古書にも。中抱
霊珠△といひ婦人此和乃徳をしるべしへ嫁をるとれ。此
珠と算のかぎりに用ゐなり。婦人此貝のごとく平生口我
とぢてよれよつをあしきまゝ時をかまびをしく口をひ
らかにして玉の温和なるごとく。心やはらかなあらんこと
我神がつり。貝ハ千万あれども。他の貝とはあらざるごとくいが
夫なしでハ男と絶ゐまぞ。外の男にあはざる。貝淑の道
をおしへすぞしゐるなり。貝ハ廉鳩香取二浦乃蛤貝七十二
合とのへて男貝の内をしハ金簿我母紀。貫乃内をしハ銀
簿と並きんがよハ子世をしやちよにちまる石のいそかと

かりてこそのむまゐぐといふ歌の上の句は男貝のうちに書
下の句は貫のうちに書べし。沸の儀にいれて捕の内に
おさむるなり。男貝捕のうちにはあり。秀衡の浦の京氣は
ちごとり。杉と菖蒲と前絵にしぶさのうちうちには渕
渚にはえさご鳥の雄雌と描金にして。是は京の天皇の光嶮
鳥とえ蛤と浮のふにしまるなりしへ夫婦別ある故称
そるの意なり。貫捕にはあり。廉衡の浦の元文をいとどもを。
杉と鳥居一基と描金にして。蓋のうちうちには水草に
蛤と前繪にして。杉にて貝合は大己貴と須勢理姫と。夫
婦むすぶの神の歌を常陸常に結び蛤貝姫のなぐ海
の前のぼくしみの貝合はなしてして。其所にさいりなれて。
あしき神たちとしりでくれ婦人の多くしものも 以上

○常陸の一書にはあり。伊勢國二見浦の蛤をひろねて貝合はなり
ほとりにふ古事に伊勢の國二見の浦にて海ぐりと貝合して
ひろふなりけりとあり。本書に此と異なり。出所何是

○女子も孫とはく
或曰女貝の羽とはくは蛟にしくられぬ禁地なり。樂華子と蜻
蛉にはて。蜻蛉は蚊と合するものなり故也。戰國策云在幸
云王指裏王拙不見夫蜻蛉年六見四翼飛翔乎天地之間
俛啄蚤虱而食之仰兼其露而飲之とあり

○女鏡臺の祝
二月廿日女人鏡臺の祝とて鏡に備へたる鏡條と考て祝
也。
近年は十日なるなり。一書云。無家春餅作囚鏡形或作菱蔬
形供神佛又贈宗親是俗謂居鏡其囚而大者謂鏡取

其形之相似稱之其因高小者謂小戴戴鏡餅之義也以
其形之相似稱之至小者謂星因似星點也兒女貼
小丸餅也 枯條而玩之是謂餅記

○餅と女とにはかちんといふ
東食流傳云内裏紀綱より一切の食物に異名を付きてめ
さる餅とは倍都 酒は九成餅はかちん味噌はむし 塩は白色
の豆腐は今宮 索麪はそもの 松葉はまつ 雞はこすじ 鮒は
ふすじ 鶴は清すじ 雉はくじ 蔵はいつ 葱はうつ 茶は
茶はおめくり 楓をまいは 引合 ひきさいふ 一次にて 紗 漬 畢 殿の
と記 欲とよく 面をかくせし 是記 古民餅をつきてもてなしれば
然国これは平 僕かし 多はれしより餅をせんといふと記しは知ふべき事也

○七夕まつり
七夕はまつりは 優神 諸記 武丁といふ者七月七日織女詣

牽牛をいひしよりはじまると記せり是詣るなる紀
多しふれどもなる紀とり 泣えて 案するものもなる紀なり
謝肇淛これをそしり是なり 紀貴之所に 雨とうとん
れどもみるねをれば 雲になる紀名のこそるなるべし
此よりもなり 又七夕をこれば 訓 其りしは 本朝上古
天棚機姫といふあり これを織女に混じて七夕をこなる
べしとあり 事詳に 廣益俗説 其のせしなる事に
略してあらせるんるべし

○亥子餅
日次記
十月亥日禁裏賜赤白黒小圓餅於群臣謂之御玄者或
称嚴重又謂嚴祥女中御下頭伊豫局調進擣餅之
木臼并木杵今日舂之謂幸著和搭得幸謂幸著福著

幸著之著與擣餅之擣和語相同故混舂斯餅称祥著
其舂之人數裳於臼下舂之時有所口誦之歌此日ほくく
小き臼にて餅をつきなふなり其と紀伝なるうたに
非有所用乃用のあしをとしに口ずさみなりふとなるべつくく
亥日食餅令人無病初學記所載亦同逆亂說云闕化
乃ちくらんことの御くらゐ云ふしめして二とせの
此月但馬の國よりはじめて亥子のもちゐをすゝめ

大和州刊下

借本ハ大永元年文政三年庚辰四月二十三日写之

隈本府下　中村　直道　ぬ

井澤先生著

女訓みはしけ

關々雎鳩
在河之洲

平安　柳枝軒

女訓英きさ草叙

そ禮天（あめ）とのぞるゝ地（つち）とくぐり高よりさの
くさぐあらゆるものかしていづれか陰陽（めが）
なるゝはるゝ志るゝ陽（が）はるゝとく。陰（め）は
いやしく貴ことゝりは。志禮なるものなれよ
あらばぞ。はしまぞ。その道（しち）をそゞへ勞志れ
ぐいをしへをうくるまあらざ禮ばはしく
がくし。我（はが）父君（うぞのきみ）うくるまひぞめ給いと

事なれ女子等に見んならはさんとて。是より
さ給ふ。女訓三まれをあらはし。須日まゝ
後編二まさ紙志るし給へり。抑中葉より
今にいたるまで。婦女乃教を記せるとの。数
十部にあまりぬまでも。なれ精しらべ
し事。此編既にし成ぬれば。是より後の日に。
漏たるを加へ給ひ事も。ア積たるまゝ。
をとにきく。伊勢の海の清さ渚乃珠も

ひろひて盡。和泉の松の茂き梢も。採ば絶
ぬべし。ぜちぐに。つきをぐ。さえを分きのは。
おとの紫ぐさになん有をるかくて書をぞ
に写をるの後。ゆゑづからが一言紙巻れなし
めに置べきよし。仰をかしかりしかども。
おろかなれ女乃。ほこなれ筆して。蛇足
を添給しんは。今は先も。おこがゆく。且は
小げなさ。心地なしとおまさ度禅をそまの

りしかばぞ志ひてきく先さ形絵へバやむおとゝ
得ぞし事。志分をる事太のごとし。こひ祢が
いらは此書梓に紀されて国さ末のかぼらな
がくはたゝ。幼女をちはすてあそびとも
成かバいはれくし事。身を修る準則
ととなるむうし

井澤氏女子次賀書

女訓みさお草上　後編大和女訓

蟠龍子著

一おもそ女子ハ七八家にもなれバ母をしたき居てバの
家へゆくおとゝ成ゆるさぞ親戚の家といへども。
往来する事なるべし。昔漢のとき靖王興と
いふ人曹王となるとく樊重といふとの女子
嫺都を娶る。嫺都うまれつき婉順まして。童
女なりしより衣服を正しくせざれバ房よりいで
ぞ。宗族といへどもお供をとうやまひしより出見
えしなり　女子ハうまれぞ恒る風などあべからず我人をこれバ
人我とうんうなり。我人をこれバ
きなをかりゆるおとゝおもしぞしむべし古紀所ゆ。
みちのくにありといふなる名所ゆるにとりてハふるしかりなり

一むかしを語こしに本壽といふものあるぞ何の母
聞くいとく富貴乃女子かれらぎ纏足するは何
ぞや纏足ハ日本の足袋の類也母答ていとく我きく聖人
女をいふしめてかろぐ志く出さば其故ハ足を
清くましむ居る不閨閤のうち我過ぎ出るは
帷車の載るあるを是足に本なれもの也聖人
かくれどくふせざこと知ぬ後世なれ桑中
の行隙邛の奔ありといつり各〻詩經に見えたり女の
みだりなる行路をそしれり惣
じて女子ハ閨中にのミ居く謂ちかく出ることなし
今世の女子とみるまいまで嫁せざるさしに妻母などあるひハ親
族乃家まつ遣ゆきて宿しあるひハ与院等まともなふ為ぐひ
ありがりての所のひがことも女ハ閨に居て所をしらざるかなり
なり所に出るハ魚の水をとるかなりがごとし名をかかし男を失ふもの也

一およそ士としてハ己が同等の女子ハ禮をもつて
むかへねるハ禮をもつて清をたふべし婦も又禮
をもつて來りぬれバ禮をもつてはかふ為し
かろしかんあかどるおとなる也家の礼なくハ書ぐて
云礼よりおこる妻をむかふるまハ子のうじめより居る妾
なしをバいとまハ出して居る妻を入れし
妾が居るうふ妻を迎へ妾が禮によりて妻を出て為ぐひおなし
云ハの事しき議するよしこれ云父母一家こんものも他の女
子をむかふまハ妾女を出さしめて婚姻をかさしむべしかゝ
ふるまひとなして妾がこゝ妻を出さんとせバ女子の親こう
んもの行の子細もなくだめくとうけとらんハ武門の服装なる
べし女子も又妾がこゝあるを出されたりとてなるぞを志てそく父母
まむかかんハいと云甲斐なし

一およそ世のとれもいやしきも心にもおろかなれ
人の親乃かしひ己がよりひの所かこふき羊の

歩く近づく半ばにしてれ子をしふ鶴の子世ば
おとゞ我栄ゆく季ばおりふのこなり山上恒良
が所ふ。志ろかゝ子もまゝ子も玉も何さんに浦されな
せうしら子に志ろかゝやもかゝよめるがおとしがらい
ほくしゆる人の子ば迎ぬまば心ようなりぬ半
ありとも七去の思さくなくバ悪ひてすぐさまべし。
已迎ざれバ栄ゆくさ思も有べきを迎へて一生ば
まてさすりは言語道断の不義と謂べし
一家に居くハ父母又嫁して後ハ舅姑夫を神明の
おとくおが見ごうとみ奴婢ばあられこ見ぐむ
おくあるバが見くよりも又いはくしまれうや

まハまゝむ父母舅姑の存生のうちハそくさんな
るやうにしひ事没後に及びくハぜておもさば
ともすべきものをかくも有べきことのばなどぐや
むおとおかしとかん古所にぜうちゆのみて
見し世ハ思ひこれとはれぬかなて月に忘しき
おしうそ月日にうえて思ひ人めぐりあふ
むりしなし孫バ嫁して夫の家にゆきこれとは深心ぐれ
ちまべしがなときハ小姑などしんを行けて孫んごろにまべし
あぐに他のことづりしふべしぞ祝なく主力も嫁してぐく
なるまあふべし男を行こそ人の
いこそぞ志られけりとしふ所のんをもつビ
一一書まいとく男子の君れ前に出るむとに衣服を
調へ礼義を伴くまゝがごとく婦人の君の前とする
所ハ夫の外舅姑の前なるに共祝くにつきて心を

用ひ容をおさむべし此條ハ身を為しかゝこ
ち紙ゝざるべきこゝ不なるしぞ尚く晴といへとも
男子の朋友往来の時のやうに有のうゝ足なる
べし若ハ女どち積ありて御じいるてあらバ
分に恵ぞる出ぞらいたも有べし今の婦女乃
為体をみ給ひ外へ出るとてハ容貌を清く
ろひ衣服をかざり桃李の色を他事にてらへ足
よそ目ぐことなく紙けがうく心ちなるに父母夫君
のいましめざりはおゆしといふもおろかなり

一天が下にいかなどかおれ人のうちにてこばかりの
縁あれバおそ夫となり妻となりしかんこれを

おりりぐがりそめ此事あれも大切にあがめこう
とみくぞむくしなうるべし為とへバ一飯を人
に得てぐふぞのむくわ紙せざれハたづるあらう
ありバいそんや異天に法をる夫の恩をやべしび
我親乃家を出ゝ夫に身を満かせてより此の
ちハ身を己が物とおもふべからず己が身とおもふ
ゆへにいきどおり恨むのあらうときこゝを思ひ
う積心ましに身をもちこれと思ひぐが称てよ
嗚せぬに志らず

一女ハ一生ひとりぐらすらず松に葛などのをよるに
似たり来紙をかれていらちま此為紙をかぶとし

これ年をとりて死とも悔べからずとて、多中にとびへんとしけれども、婦ひきたるまをとらるゝぞ、ほゐに幼女をすて、母を負て後さ下にいたる。母なく半かぎりなし。見るものこれを問、母答ける、婦がたづさへたる児童は先妻の子之。持たる幼女は生るところ此子之、その子を持て我をなぐ。んざし多ぐひなしといふ。少人かれが存を感じて母をたづさへ。幼女を負て、おくひしかばおのくほがなくぞとまぬかれたり。存と義とふたつながらまつたしと世に感じけり

みさき草上終

女訓みさき草下　後編大和女訓

蟠龍子著

一 藝をなし婦とぞ。たこを教事なるも。今日ハうち障あり。明日より明後日よりなどいふうちに。ぼさらがしくて。なすなぬなり。人はいたづらにくらしてゆへよざ。ぼくれ悪事出来るなり。島の大聖すらず。陰をおしまゐ。孫文おろかなる身は。分陰をおしまんぞ。おれ間もいたづらにすぐ。ぼべからず。親の家にあるとれば。いつも自由なるゆゑ。ぬ。藝能をもしらくまるばぞずぞふ。史乃家にゆきて子どもなと出来ぬ。ゆゑにしもすして。後悔するものおほし。欲り。今もなれ先なるさ身れく申しきはむりしあつめぬ。堂なるを

ひり人まものの紙打ゆるまいぶんとうひまべしぢのりたくてびまぬ程
まきべしぶぶさものをぞさりふせめくげませば蔓にまくまい
せぞぞやむるものなりやむるすうかりぬ撥抄なまばかるうぞ
病をせまるなり

一 或曰うえ浴むぎをもち縫すれば機織くことのなど。
ら浴づ女の職分たてるべからぞ。女のまさは魚乃
水まあそぶがぶし。魚水まとかまれば片時もなりこれ。
女の職もおなこと。然ばそちまた事を欠なり。む
うしは世の中せはくしかしこれ。男女ともに無病にて。
氣根つよかるしかばぴとりしてけ殺の事成り孫
なしとり。今年の夏なし至とのは明年の夏の帷
子とも成。今年乃冬なし至りのは明年の冬の小袖と
なりしかばされをあそこいそぐことにくぶる事

なきいとゆまてあそびなりけしとうきをうみ。
機と織。洗濯は。中より下の人のなすを不なり。糸紙
取裁縫は上の人のなすをところなり。下より上成り。
上より下、成り孫家。通ぜばといふことにし

一 小所なるものゝ妻。えんづらの裁縫に倦事。物縫を
めしうへ。ゆきにゆゑ孫を紀。茶酒のこくらひ。淫奔
根藝乃草子にはゞ孫を蕩しうたを酒の飲は。雞
鳴までも起居。ある孫さんは晝は。合時までも臥居て。
夫乃外に出るなれば。家の事に心をつけぬを
くひありうなるものゝまそはかなりぞ。外をほうぞし
家をとしなふまいとる也

一女ハいろ程の蔭ありともいへんづからかこりて。人にしめせ
事なりまし。長者言曰。男子有德便足才。女子無
才便足德とあり。是は才なきはよしなきかハ
あらはす才あるほどとかくしてあらはさゞるをいへる
なり。むかし趙國王乃后懿德皇后蕭氏ハ。容色
世にすぐれ。賢德ありて。詩は賦し。書を能し。筆
琵琶にも達せり。帝甚ぐ本乙辛して。清寧元年
十二月。かしづきて皇后とせらる。同三年かし。皇子は
せり。しかるに耶律乙辛といふ者。嫡々皇后を娶る
事ありて。いらにもし事。皇后を失ひ無ともらる折
ふし。皇后音樂を好して。趙惟一といふ者を召て。

筆を彈ぜし。此くぎく給ふ耶律乙辛等。時は得
たり。さよりおひ。他人に命じ事。十香乃姫詞をは
ちらし。此木頂鶴といふ者の妻。清子をかくしひて。
これをもかくしむ。清子皇后にいたりかの姫詞をた
づさえて。是ハ宋國乃戚里蹇が作る事也。願くハ書
してそ酒のらば。二絶と称せんとまゐれ。后よみて
これを称し。りかさより能書とうはもつて。手ばら
書く紙にあらはしその紙の尾にぞんづから作りまし
懷古乃一絶を書給ふ。其詩曰。宮中只數趙家女。
敗雨殘雲悞漢王。惟有新情一片月。曾窺飛鳥
入昭陽。是ハ趙飛燕が事を賦せり。此詩乃中に趙惟一の三字

あり。因く趙惟一は通ぎなと終をしかば。帝は禍をもそぐけれど。所以和害せしを捨てり。其は傳へく。懿德后賢なりといへども。此禍に遭ひは。音樂を好き。詩を賦し。書は能し。其藝にかなひ捨し故。無實の譏まあれしといへり。因て言所を深じ書は。よむがやはしきといへて。男の所にたる物誠をとまて。漢吟ぞるいかるつくしと。文字もねんの故書燈ひの人のあるうまでいかなるべし。

一 むかし莒の相叔文といふ者の母がいはく。君子詩書射御をまなばざれば。博賽はあるあり。小人田作を好ざれば。竊盜はあるあり。婦人紡績織紝を好まざれば。況淫佚は行あるといへり。

一 潁川の趙氏が女子を。虞韙に嫁をしむると紀。母女子

なれたり出くいはくはたんでよ紀事をする。おとなかれ。女子がいはく。好事は我なさぞんばあしきことは我なすべきや。母がいはくよ紀事あらかすべからば。況やあしき事をやといへり。因言。むかし明のとき紀に。李景といふ者。胡則といふ者に。江州江南を守らしむ。曹翰といふ者。城をかこみくせむれば。陥ぞあると紀。胡則饔人に命じて。鱠魚は法くらするによろしからば。胡則いかつてこうさんとは。其妻とじぬくいはく。士卒城を守つて年をかさ孫より。死る者がぞ我しらば。しかなりし食物をもつて。士卒をおろさんやと

いふ。胡則ゆとりかしてやめたりかの饔人こ
れをきくゐ。恨をふくみ。城をはしまして曹翰が
許をいたる。曹翰かれを近づけて。城中の虚實
を問。饔人がいはく。市城の西南ハけはしきいなを
のこして。守れ兵れし。足よりせめ入ゐ事ハ。よ
ろしかんなまうひ。曹翰かれを案内として。
せめ入れ。案ちがたく。防ぐ兵なりしかバやすく
しくせめれとして。胡則一門をおろぞ討捕
たり。胡則が妻がいさめ。理にあたれとゝいへども。
よき事もせざれといふ。始まあがへり。とまもかくに。
女のさしあたるハ害あるゆ。右のおとし。仕し事に

よるべし。一條なるべからず

一 こゝろこし武宗皇帝のほかひ給へる女乃中に
孟才人といふ人あり。容色あるゆ。よくうたふ。帝
甚だ愛し給へり。あるとき帝病をうちくあ
やうし。帝孟才人をよびて。朕病おもし。死後ハ
汝いだくまゆかんやと問ゐ。孟才人こたへていはく。
まれいゆしき身といへ。君王の寵をうちたり。
陛下りし美嶽のおちハ。ぜひなしとなりたんと申して。
帝御榻の前にをいて。河満子一曲（河満子ハ歌の名）をうたい
し。ゆたかな声としのかなさ。やうしてきくものかなさ
ばなるさげるはなし。帝崩し給へるゆいたゆ事。

かぢにかれしむ半かぎりたく数日ましてあらり
則山陵のうちにに葬まつり
我朝にても村上天皇崩じ給へるのあらう。宣耀殿
女御芳子（小一条左大臣藤師尹公女）帝の御事をいみしくなげ
きやまひになりて、ぱかなく成給へるとの御分に
おくれてもあらんあらんとのを死手の山さらぶらと
成行なげきけん。村上天皇は御寵愛のうちあまた
ありしかども。なげき死しのへるは。此女御一人
なり。武宗帝の孟才人と相同じ。常ならは誰か。
かばかりをあらんとは知べき

一 鄭公路といふ人江外宦と成て。その所をいくる

とて船を江渚をしほかぐ。しるかを不をし。盗賊ねらく
来りかこみくのがろくかくれし。盗賊ども金幣にい
目もうなげしていとく。船をし美色の女子あり。倚て
さまべしかそのぞむ。鄭公路一家。各目にあらんあるもそ。
あらふかとのれし。女子いくばりひけんぞんでゆん
と請賊よろこびて則小船をよせて女子及び婢女
二人をのせて去。鄭公路以下は是れなく漕出して
其所に退きけり。女子盗賊にむかひていとく。君ぬす
こんなをとらへども。居所と親属なるべし。何も
君の妻なるべし。女礼をもつてうごふまねよびんや。
やがひに贄を通じ親族を會して好逑をかさん

といふ。賊ぞなりと同じ。女子いとくしうるよいかし。奥さ
るところの婦たりの婢女をば。我家ようへさんを請。
其かたち頭ぼうのあと柴順なりはもつて旨よける
ふとかくぬたりの婢女を。船に乗りて帰さり。かくたる
つゝて後。彼女子身を江に投て死しけり

一 滄州の鄧廉といふ者の妻李氏は容色他にすぐれたり。
嫁していまだ一ヶ月ならざるに。廉卒しぬ。時に
李氏はづかに十八歳なり。霊几を備ふ事。毎日こと
び食を供へ事深哭し。布衣蔬食すること六七年に
及べつゝ。しかるにある夜の夜ふかたち夜ぬ男子来て。
李氏を妻とせんことを我ゆるさむ。李氏夜中にゆるさ

しかるしよりのち夜ごとにまゐんへて偶をもとむれ
ども。李氏終にうちかつ。大にすけさせていはく。吾誓
事言をうつさぞといへども。妖魅のあるにしたりて
半是れなし。是我容貌のいまだ衰えざる故
なりとて髪を切。面我あらはれ衣をすらげしし
かば。彼鬼又夜に来て李氏に謝していはく。まん人
竹栖を操不可棄也と。是よりののち夜にはこそ。
那日子の操を感じ門閭に旗して世に知しむ。
今にいたるまでなり。我前婦里とよべり

一 人は生涯かくて半有べからず。かくしたのびあるにふ
すなそす。皆あしきなり。よろしからねと知るは。

猶よくなちさりけしまつべしかくれたるよりあらハ
なるはれしとつゝるぶらくかくそといふ一物出来ぬれバ
あらハ新といふ一物添なり。古語に人間私語。天聞
若雷。又曰。欲人勿聞。莫若勿言とあるがごとし
一古語曰。一念之善。善神隨之。一念之惡。厲鬼隨之
とあり。父母舅姑夫君ハ我ゝ子とびたふ子の国と
あらバ神明の免ぐこゝありて。福をかさぬべし。恨こ
憤る邪の心あらバ。厲鬼の祟有て。禍を生ぜべし。
をしへど。鐘をうてバ。鐘の音あり。石ハ多くけバ石
の響あるがごとし。同心相應じ同家相求ゆ乃
道理なり

一何事も時節到来とかゝてよりかく詠しあよろ
こびあもなげきにもゆきあるりて。おどろくべからず。
留る我もまとめずまづしき我もいとゝぞ生をむさ
ぼらぞ死をかげかざる程なるらバ自然ましてんやす
らかなるべし。しふ事の事がひてまゝなるぬからは世
のなるひるれバ。孫く詠しるはなしで詠をぬが
結句かなふ為ぐひおなし
一むくろハ鏡の如くまべし。鏡ハ人来りてむかへバ其新
うつ分。立のなるバ新をとゞめぞいかなるも恨むもかず
我とゞめぬやうにせバおくろやまゝかなるべしされな
国ゆりくしてみづからくれしむハ。下にあるかなり。

さぐつ孫に誠をもつかつてふまぐべし。誠といふもの我に
あまたば身ハ心に引こそ禁事。せんと思ふ事の
なるぬハなし。誠とハ我胸に在神明なり。人心
はじめハ澄る月のごとくなれ共迷の雲におほハ
されて。身を終るまぞ。ぢとさねハ口をしかるぞや。
欲に。ほしあれバなほ我むかる偽をなぐはま
ことの神にまうせて。月の本ハ神の御國と申し
より在すがごとく我むと我思れ。九年にあまま
る神のうぶすけとうつて境を今もくりしじ
すむ月のかぎ我うけしてあ平於川にごらぬ世も
久る浪かな。いかしへに神の御うぶのうはりしや

今もくりしぬ勞績なるしな

一人のんハたるもがこしぷんこれまくれ人ありぷんこると
こゝろ大りかれるありぷるも我はるそ偽る
らぬ。是ハ誠しなど卒尓にさぐむべからぐ。人乃
苦悪ハ聖賢といへだまこんそこなひなりぷいたんや
おろかなる女の身をやぷいかにしき人なるとと
とぷちとけてとこれおりへかくこそおりへなどく
いふべからぐ。ひそかに語しおりへども其きなるもの
庭をしりぞ。れぷこへにむかひていぷの人乃いとぬ事
まぞ。はくりそへ。おこづきあざなるんハ口をしかる
べき事なり。又物孫がひなどぬかるべからぐぞち

ありとうへくて後撰新古今の開書などを有しを。
取集ゆりてかくし言ふしけるおふし管領出仕
せら稽しが作る事がゆるまひ女房が為相いとゆし
を覚て侍る其上洋孫ぐ武平ハ後よく法とめ
ゆるゆ申されしかば將軍も不便の事におぼし
めし稽かく免しうへされて本領相違なく賜ま
ひりと記をり

一ある女の書るものに人ハ氏よりそぐちといふ事あり。
女ハ神文報ゆるものをとなくべし中は伊賀國に
住ける人あり其ま留て子めよれ女子あまたもそり。
稽るかの人數多ハ讀ばいかまして女子だ後人が聞く

そぐそそ紀とのといひけるが浮くりく心事をめぐらして。
あらうふかのが寵に茶店を志つらひ多くの人を出
入せさ珍。其中にて女師と成べき人を志らしびて女子
だに習ハせばやと。心ひ立ける。其居所ハ大路より也
儀なりけるとハ大路に当れと立て南夏いさらの人
ざし有て茶を点じ侍り。貴賤男女に限らず。立寄
御しくて五七日が間も此兒を休めく通らをあふべき
由紙記しけるに。多くの人来り集るなひきもきらず。
かくて夏も来ぬるに及ぶ法なひ年の齢四十ばかりの
女房と同じ比の尼と二人出来れり。主これを塩ゆるに。
そぐ人なるべしとうハ婢女を出して中の亭へ請じ入

て相くみりてれし。三人の女子ゆゑにて此上臈のあれを。よ
くく見なれとしひふくめりかくて。父母女子だけ
呼て先祖より何事をかんはると問ハ。婦二人ハ。十八
十六成りるがおとゞ成そろへて。今まで包食女とみよと
ありしハ。我等ハ包食せよとおぼそものふ事とかれ。
季の女子ハ十三ハ成りるが。此上臈のあれなどやつもさせ
ゆへだなべくなしぬ所あれなれバ。其相辞とみ男へ
との所事にこそとれとかしやうにかをしらば。父母
きハめていみじかなわめて。婢女一ゐ人にかつきて。是の
湯あらを。帷子きうへさせ。こ面やうまあつかいせ。そかして
問をりるに。志げしハ清むやうにをしかしこ面

くと語りひける。是ハ大納言何某の小方にて聞まれが。
大納言此ころハ世にまれそうひゆふなりて。遠き所に
おりしまれ。所子のおれ何後とかはもかなくこれくに
那さゆひぬれバ。其うれ之ひの末により。祈の為にうら
れおりふよしを語りひけり。相ハいぼくも同じうれ無の
中にて侍れバ。那近き所ゆゑにて。物志づかに志げし
此所にこゞ聞くをゆへとかけるに。此もあらばいりまう稱
うんとの事ふに。ゆ大に抜ひて。件の十三に成女子を出
して。是ハまめやかに山ぶところの賤の女にて。芹摘と
ゆゑ所ハ那侍らば何事をも教習いさをゆへと。父ゆゑに。
那なるしばいりまれしくかそかしきこえんみめくち。

美佐古草者文政五壬午年
十月十四日借渡邊氏寫之
中村萬喜直衛